NO5 月経異常から疑われる病気は？

月経痛は、ほおっておかないことが大事！大変な病気が隠れていることがあります。生理休暇等を利用して、病院受診しては？産婦人科のパートナードクターをつくるといいですね。

Point：こんな症状があったら、我慢しないで医師に相談しましょう。
□月経周期が 39 日以上
□3 ヵ月以上月経がない
□月経量が多い
□月経痛がつらい

月経に伴う異常としてよく見られるのは、①月経周期の異常、②月経量の異常、③月経困難症の３つ

＜月経周期＞正常範囲は 25～38 日、月経周期が 39 日以上の場合は「希発月経」、月経が 3 ヵ月以上停止している場合は「無月経」。希発月経と無月経は排卵が起きていない状態ですので、性周期に関係する脳・卵巣・子宮のいずれかに異常が起きていることを示すサイン。

＜月経量が多い＝「過多月経」＞女性の貧血の大きな要因。子宮筋腫や子宮腺筋症などの婦人科疾患を疑う必要も。子宮筋腫や子宮腺筋症のため月経過多になり、貧血を起こす。

貧血⇒職場健診に貧血検査を入れる要請が必要
症状：動悸、息切れ、頭痛、めまい、倦怠感など。
原因：鉄分の不足、[毎月の月経（鉄分の消失）]「ダイエット（鉄分の摂取不足）」「妊娠・授乳（鉄分の必要量の増加）」など、女性は不足しやすい条件がそろっています。
☆自覚症状がある、健診で貧血を指摘された場合は、産婦人科の受診をお勧めします。予防のために、鉄分を多く含むレバーや肉、魚、ほうれん草、小松菜や、鉄分の吸収を助けるビタミンＣを含む果物、野菜などバランスよくとることが肝心。

＜月経困難症＞月経中に繰り返し起こる下腹部痛によって日常生活に影響を与える状態。器質的な疾患を認めない（身体的には原因がない）「原発性月経困難症」と子宮内膜症や子宮腺筋症が原因の「続発性月経困難症があります。

☆子宮内膜症：近年の晩婚化や少子化に伴い増加傾向。
子宮内膜（妊娠すると胎盤になる組織）に類似した組織が子宮内腔以外の部位で増殖し、月経周期に伴って出血を起こして周囲組織との癒着をきたします。病巣の多くは卵巣（卵巣チョコレートのう胞）、子宮をはじめとする骨盤臓器を包む腹膜に発生し、同じ骨盤にある直腸、膀胱や尿管にもみられることがあります。女性ホルモン（エストロゲン）によって進行します。
症状：病巣の発生部位によって異なりますが、代表的な骨盤にみられる子宮内膜症では、90%に月経痛が認められ、約 50%で月経以外の時期の下腹部痛や腰痛、性交痛、約 40%に排便痛がみられます。不妊は30～50%に起こるとされ、女性のライススタイルに重大な影響を及ぼします。

図1 子宮内膜症と子宮腺筋症の発生部位

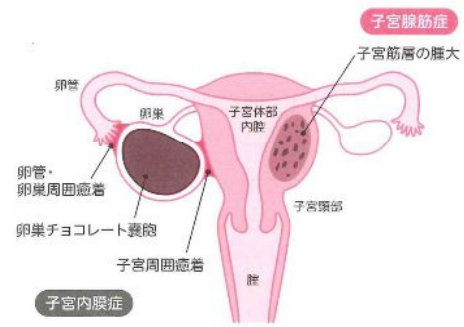
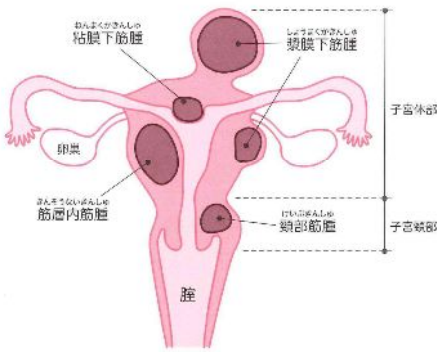


図1 子宮筋腫のいろいろ



☆子宮筋腫：一般に閉経までは子宮筋腫は増大し閉経後に縮小します。しばしば子宮筋腫は変性します。子宮筋腫に出血が起こると組織が赤くなり、組織がえ死に陥りしょう液が貯留することもあります。また、筋腫が石灰化することもあります。
子宮筋腫の 9 割以上は子宮体部にできますが、子宮頸部にできることもあります。子宮筋腫や子宮内膜症はエストロゲン（女性ホルモン）の影響で悪化することが知られています。これらは閉経すると悪化しないことから、ホルモン剤で排卵を抑えて、閉経状態へ持ち込む「偽閉経療法」や閉経に近い年齢の場合にはそのまま閉経になることを期待する「逃げ込み療法」も行われます。